

ドクターインタビュー

高橋 邦明(たかはし くにあき)先生

高橋皮膚科

大阪府大東市で皮膚科医院を開業されている高橋先生。大阪
市立大学に在職中、約35年前より漢方診療を始められ、現在
も皮膚科診療への漢方医学導入による東西融合医学の確立に
携っておられます。

——先生はアトピー性皮膚炎の治療において、一般的な皮膚
科治療にプラスして東洋医学を導入されておられますが、治療
方針などお聞かせください。

当医院では、西洋医学的な標準治療をベースに一般の治療では限
界がある患者さんや東洋医学での治療を望む患者さんには、漢方
を導入したアトピーの治療を行っています。一般的な治療を行って効果
があればよいのですが、時には「次の一手」がいるなという時に漢方
治療を試みています。漢方診療を行っているということで、症状がな
かなか改善されない患者さんが遠方から来られることもあります。診
察では、患者さんが漢方治療を理解し納得してもらうには、やはり一
般的な診療より説明に時間がかかりますから、どうしても一人にかかる
診察時間が長くなることもあります。

——治療に漢方を取り入れられたきっかけなど、教えていた
だけますか？

昭和50年代前半になりますが、私が大阪市立大学医学部付属病院
の医局で研修医として勤務していた頃、同じくして大学院を卒業して
助手として勤務されていた石井正光先生が、漢方診療に取り組むと
いうことが始まりでした。石井正光先生とともに、アトピーではありませ
んが難治の乾癬の患者さんの治療のために、当時京橋で漢方内科
を開業されていた山本巖先生(故人)を訪ねたことがきっかけでした。
山本先生は熱心に患者さんの話に耳を傾け診療をしてくださり「1年
ぐらいがんばれば良くなりますよ」と言われ、それならがんばってみよう
と処方された漢方薬を病院に持ち帰りました。その頃の漢方薬はエキ
ス剤ではなく生薬ですから、煎じると独特のにおいが病棟中に立ち
込め看護師長から大目玉を食らいました。その後、患者さんの症状
が徐々に改善され始め、大阪市立大学では「漢方は効く」「勉強しな
いといけない」という認識が変わっていきました。そこで、山本先生の
所に勉強に行くことになり、実は私自信がもともと重症ではありません
がアトピーでしたので、自分の症状についても診断してもらいました。
「小さい頃に、中耳炎や扁桃腺がよく腫れませんでしたか」と聞かれ、
まさしくそうだったので驚きました。自分で飲んでみるのが一番の勉強
だということで、漢方薬を処方してもらい20代終わり頃から飲み始め
て30代半ばでほぼ治りました。成人で治るのは珍しいことですが、完
治しました。私が医局に入った時には、大学病院に漢方薬のほとん
どの処方箋が既にあったんです。先輩で小児科の塚本祐壮先生(故人)
が、既に「ぜんそく」や「アトピー」治療に漢方薬を手掛けておられ、東
洋と西洋を融合する土壌が大学に整っていたんです。扁桃腺が腫
れて熱を出したりする人は、解毒証(体質)と言って、アトピーの人にも
多く非常に肌が乾燥して荒れやすい。そういう症状の患者さんの体
質改善には「柴胡清肝湯(さいこせいかんとう)」という漢方薬を用い
ます。私も自分で経験したので今も患者さんに勧めますね。私たちの
師匠、山本先生のスタンスは西洋医学がベースで、その西洋医学の
病態に応じてその漢方薬を構成している各生薬の薬能(薬効)を知
った上で、それらを組み合わせることによって病態に対処するという
考えでした。それは医学部では勉強しないことだったので、やはり自
分が治療を経験しているということには意味がありますね。

——アトピー性皮膚炎の漢方治療について詳しく教えていた
だけますか？

アトピー性皮膚炎の治療は、まず、西洋東洋を問わず、悪化因子につ
いて検討することが大事です。漢方治療は本来、患者さんの疾患だ



DOCTOR INTERVIEW

DOCTOR INTERVIEW

高橋 邦明(たかはし くにあき)先生のプロフィール

1976年	大阪市立大学医学部卒業
同年	大阪市立大学医学部附属病院臨床研修医(皮膚科)
1978年	大阪市立大学医学部附属病院臨床研究医(皮膚科)
1979年	大阪市立大学医学部皮膚科学教室助手
1984年	高橋皮膚科開業

日本皮膚科学会認定皮膚科専門医
日本東洋医学会漢方専門医・指導医
医学博士

けでなく環境を含めた全体感を重視するという特徴があり、生活環
境への配慮や生活習慣の見直しを重視します。そこで、薬物療法だ
けでなく、生活習慣指導、特に食習慣の見直しを行います。近年のア
トピー性皮膚炎の難治例の中には、食習慣を見直すことによって、改
善する例も少なくありません。近年の食生活の激変とともに増加した
アトピー性皮膚炎の難治の病態を考慮すると、食養生(食事療法)が
アトピー性皮膚炎治療における重要な要点の一つになっていると云
えます。ステロイド剤が嫌なので漢方をという考え方はあまりに極端過
ぎます。そして大切なのは、漢方方剤の適切な選択です。アトピー性
皮膚炎は長期にわたり、増悪と寛解を繰り返すという特徴がありま
す。治療で用いる薬剤もどのような効果を期待して用いるかを考慮し
て選択します。例えば「補中益気湯(ほちゅうえききとう)」はアトピー性
皮膚炎治療において、長期にわたる悪化の波を軽減させ、ステロイド
外用薬などの量を減らす目的で用いられます。搔破行為を助長する
イライラ感を早期に軽減させるためには、鎮静作用を有する「黄連解
毒湯(おうれんげどくとう)」などを用います。また、湿疹病変に対して
利水、清熱、祛風作用を併せ持つ「消風散(しょうふうさん)」のような
方剤は短期の視点から皮疹を消退させるために選択されます。漢方
方剤の成分に対する感作が起こっていないか経過途中においても
注意が必要です。

——漢方治療をお考えの患者さんにメッセージをお願い
します。

「漢方=長いこと飲む」というイメージがありますが、即効性のあるもの
もあります。漢方の目的が今、短期決戦で症状を和らげたい目的で使
う場合と、やや長期で体質改善という場合と、漢方と一言でいっても
色々違います。また、特に子供さんは、飲みにくいと感じると思いま
すがお母さんが「うわー」という顔をしてはだめです。お母さんがこれ
は美味しいよって感じなら、子供さんも意外と受け入れて飲んでくれま
すよ。子供さんには出来るだけエキス剤を処方して、シロップなどを少
し加える事で飲みやすくすることも出来ます。そして、東洋医学では
医食同源といって、食べ物を重視して、環境要因にもこだわります。食
事はまず甘いもの、添加物の多いもの、から揚げやポテトなど酸化す
る揚げ物などを減らす。出来るだけ和食メニューで適切な栄養バラ
ンスを心掛け、食べ過ぎに気をつける。腹八分目がいいですね。普段
の生活では、早寝早起きで体内時計に逆らわず自律神経を安定さ
せることが大切です。

——この度は、貴重なお話ありがとうございました。